

書評

津川康雄著 『地域とランドマーク —象徴性・記号性・場所性—』

（古今書院、平成15年）

香 川 貴 志

Book Review

Yasuo TSUGAWA : Region and Landmark

Takashi KAGAWA

我々が生活を送っていくうえで、空間を移動することは日常頻繁に生じる行動である。その際、そぞろ歩きでない限り、「ここまで来たから目的地は近い」であるとか「確か郵便局の手前を右折すると聞いたから……」という一種の指令に基づいた行動がなされている。こうした規範は幼児の頃から間違いなく実践されているもので、空間移動に際して我々が目印にしている具象性ある事物は全てランドマークの一種である。やがて数あるランドマークは、多くの人々から認められることで自らを磨かれ、その具象性・象徴性を高めてゆく。

しかしながら、地域や空間の構成要素を研究対象にするにあたって、構成要素の一つであるランドマークを内包する空間、そしてランドマーク自身が徐々に具象性を欠いていった。本書の序章において、著者は「リンチの研究はきわめて抽象的な都市のイメージに対して可能な限りの客観的分析を行った…」(p.6)と記しているが、実のところリンチ以後の研究の多くが客観性を重視するあまり、結果としてランドマークそのものも具象性を軽視することにつながったのではなからうか。序章5節の「ランドマークは、認知・行動空間における点的な認識対象として捉えられ、ランドマークのもつ多様な特性は捨象されていた」(p.19)という記述は、まさに既往の研究が忘れてきた、本来のランドマークの復権を志向する著者からの強いメッセージといえよう。

序章と終章を除くと、本書は9つの章からなっている。このうち第1章「ランドマークとは何か」では、著者によるランドマークの位置づけがなされている。それは、国内外の具体例を挙げながら、多くの人びとに認知されるランドマークの特性へのアプローチである。具体例に関わる写真では、より象徴的な例に差し替えた方が理解しやすいもの（例えば、写真1-2を東京駅丸の内口や門司港駅にするなど）、内容的な重複（例えば、写真1-6,1-7,1-8）もあるが、ともしれば硬く

なりがちな内容を扱う箇所では、写真の多用が功を奏しているといえよう。「ランドマークの特性」を整理した図1-3 (p.41) はシンプルで理解しやすい図であるが、ここで取り上げられた4つの特性のうち、認知（視認）性が本書のサブタイトルに無いことについての説明が欲しいところである。

第2章「都市の形成とランドマーク」では、札幌の都市形成史とランドマーク（テレビ塔や大通公園など）の成立が考察されている。市街地中心部近くでは徹底したグリッドパターンを示す札幌は、番号の付けられたブロック（京都のように通りに番号が付くのではない）ゆえに座標系で位置を確認できる都市であるが、その原点とほぼ等しい場所に立つテレビ塔がいかにランドマークとして重要であるのかが指摘される。評者は2003年5月に真新しい札幌駅ビル「ステラプレイス」の展望台に上ったが、そこは確実にテレビ塔の展望台よりも高かった。しかし、その折に耳にした「ここもいいけれどさ、やっぱり札幌はテレビ塔だよ」という地元客とおぼしき初老女性の言葉は、長らく親しまれてきたランドマークの象徴性を代弁しており、著者の指摘の正しさが傍証される。

第3章「城下町におけるランドマークの形成」では、近世城下町における城郭の機能、加えて近代以降の城郭跡の土地利用変化が扱われ、現代では城郭跡地が主に公的施設に利用されている事実が示される。とりわけ城郭および周辺の土地利用を整理した表3-3 (pp.87-88) は、かなりの労力を要したと思われ、相応以上の利用価値があり圧巻である。章末では、城郭は当該市民と観光客の双方にとって重要なランドマークであるとのまとめがなされるが、こうしたランドマークを都市や地域において創造していく必要性も訴えられる。そこからは、地理学に 응용科学としての役割を求める著者の姿勢を垣間見ることができる。

第4章「宗教的ランドマークとしての大観音像」では、全国各地に展開する大観音像がいかに造立されランドマーク化されていったのかが追究される。なお、著者による大観音像の定義は高さ25m以上の像であり、その一覧表が表4-1 (p.99) にまとめられている。著者は、観音像が安らぎや安堵感を与えやすいものであるがゆえに各地で受け入れられていったこと、いずれ文化的価値が見出される可能性が高いことなどを指摘する。信仰心が低い評者は、宗教性の高い巨大施設に一種異様なイメージを抱くのだが、それでも奈良や鎌倉の大仏にそうしたイメージは持たない。歴史を経ると荘厳なイメージが醸成されるのであろうか。その点では著者の指摘は的を射ているといえよう。ただ、本章1節に「宗教性がランドマークに反映される場合の一般性や特殊性といった要因を考察」(p.94) とあるものの、一般性や特殊性の内容が読み取りにくく残念である。

第5章「都市のイメージとランドマーク」において、著者は京都の近現代を中心として都市のイメージがいかに形成されてきたのかについて述べている。そうした意味で、本章は京都の都市観光発達史としての読み応えがある。ただ、ランドマークそのものを扱った箇所は少ない。しかしながら、京都は多くの寺社仏閣を擁し、それが文化と相俟って京都のイメージを形成しているので、イメージ追究はランドマークの追究に帰着する。章末に記された「歴史都市の抱える問題は、現代都

市として機能する際の数多くのミスマッチにある」あるいは「二律背反的な課題が今後も現代都市京都の抱える問題として表面化することは想像に難くない」（ともにp.131）は、京都で暮らす評者にとって共感できる指摘であり、同時に遠来の観光客に是非とも知っておいていただきたい事柄でもある。京都は決して観光客のためだけの都市ではないのである。

第6章「地域イメージと自然的ランドマーク」では、群馬県内の公立高等学校の校歌を題材として取り上げ、歌詞に盛り込まれた山河等の名称を自然的ランドマークとみなした分析と検討が図られる。山については、平野部から山地部に向かうにつれて谷筋に従った山の名を歌詞とする傾向が指摘される。一方、河川については、認識できる範囲が狭いため、当該校に最も身近な河川を歌詞として用いる傾向が指摘される。小学校の校歌を題材にした先行研究を紹介していないのが若干気にかかるが、景観構成要素の一つとしての自然的ランドマークの重要性が指摘されたことは、従来のランドマーク研究の多くが人文的ランドマークを主題としているなかで貴重である。

第7章「日本標準子午線とランドマーク」では、東経135度の経線に沿った自治体が標準子午線をいかにモニュメントとして具現化したのか、そして各モニュメントがいかにランドマークとして「地域づくり」や「まちづくり」に活用されているのかが紹介される。明石市立天文科学館を代表として、標準子午線の通る5市11町のうち、実に15市町が何らかのモニュメントを設置している（p.161）のには驚嘆させられる。標準子午線そのものは景観として捉えられないものであるがゆえに、視覚化すなわちランドマーク設置（モニュメント設置）が求められるのである。完成したモニュメントを活用してのイベント実施についても触れられているが、それはまさに著者が「地域づくり」に向けて主張したい「地域資源の発掘・発見」（p.169）に他ならない。

第8章「テクノランドマークの成立過程」においては、パリのエッフェル塔に始まる鉄塔を「テクノロジーの進歩により生み出されてきたランドマーク」（p.172）と規定し、名古屋テレビ塔、二代目通天閣、札幌テレビ塔、東京タワーなどを事例とした考証がなされる。これらの鉄塔には全て展望台が設置されており、見られるランドマーク（＝都市のシンボル）であると同時に、市街地を俯瞰する（＝他のランドマークを探ることができる）設備であることが特性といえる。しかし、電波塔としての機能を有する場合、テクノランドマークは「宿命として、時代の変化に翻弄される存在」（p.187）である。それゆえに「（テクノランドマークの）意味と重要性を認識し景観形成に反映させることが、地域づくりにおいても必要」（p.189）という著者の主張が重みをもつことになる。

第9章「地域づくりとランドマーク」では、竹下内閣の「ふるさと創生事業」を活用した群馬県下の市町村における取り組みが、しばしばランドマークを生み出す契機になることに言及している。評者は、どちらかというところ「ふるさと創生事業」を保身的な政略から生じたばら撒き行政として批判的にみているのだが、税金が住民参加の地域づくりに活用されている事例を本書から知るにつけ、同事業を肯定的に捉える視点の必要性も多少感じるようになった。ただ、著者が全面的に「ふるさと創生事業」を肯定しているのかといえれば必ずしもそうではない。あくまで行政と住民が知恵を出

香 川 貴 志

し合った事業の過程と成果が著者によって評価されていることを、立法や行政の現場にいる者は肝に銘じておく必要がある。

終章とあとがきでは、全体のまとめと著者がランドマーク研究に至った動機などが記されている。これらから読み取れるのは、ランドマークを実質的に捉えていくことの提言、およびランドマークを地域づくりに活用していくことの提言である。ひるがえってリンチ以降、多くのランドマーク研究において、ランドマークそのものが難しい学術用語になりつつあったのではなかろうか。本書の前書きにある、横浜のランドマークタワーやGPSカーナビゲーションにおいて、一般の人びとが意識するランドマークという言葉は、果たして学術用語のランドマークと同義なのであろうか。もしかすると、両者の間に深くはないが浅くもない溝が存在しているのではなかろうか。評者は、従来築き上げられてきた学術理論を否定するつもりは決していないが、余りに学術的な定義に拘泥し過ぎると「研究者の一人遊び」という状況が生じかねないとも思うのである。こうした危惧をかなり解決してくれる本書は、研究の活用や応用というカテゴリーにおいて、今後の可能性を照らし出す強いメッセージが託された書物といえる。

(かがわ たかし・京都教育大学教育学部助教授)